

平成3年度こだま会活動実績

サービス協会への協力（協会の訪問看護婦に同行して）

	4月	5	6	7	8	9	10	11	計
清拭介助を4人の対象者に	4回	5	6	4	3	9	10	10	51
入浴介助を4人の対象者に	10	12	13	16	14	14	16	11	106

その他の活動

	4月	5	6	7	8	9	10	11	計
ゲートボール介助	3回	3	3	2	2	2	2	3	20
車椅子散歩介助	6	4	5	5	5	2	5	2	34
市事業への協力	5	4	3	3	3	3	6	4	31

しかし、ここで驚くべきことは、その活動頻度です。三浦市には本格的な介助ボランティアが少なかったために、その活躍が目立つ格好になってしまいましたが、それにしてもここ1年間の実績には目を

見張るものがあります。

また、このグループの特性は、参加協力し、その活動の幅を広げています。

左表は、平成三年十一月末日現

そうした活動で知り得た方々との継続性を重視している点で、グループの主体性をもって、リハビリを兼ねた車椅子による散歩介助などを実施しています。

そのなかで、そんなこだま会のメンバーが、異口同音にこの体験学習について語るのがその優位性です。

「単なる福祉講座と違ってこの体験学習には、介護実地訓練があります。それも福祉の最前線である在宅訪問サービス、訪問看護やホームヘルプサービスといった、いわゆる現場のシビアさを、その目で確かめることができるのです。そこには、決して奇麗ごとだけではない人間の生活があります。」とは、こだま会の会長を務める佐藤和子さんの弁。

さて、もう一つこの体験学習には、他の事業ではあまり見ることのできない独自性があります。

それは協会では実施される各種在宅保健福祉サービスの適正評価を、一般市民の目からただけるといえます。体験学習参加者には、受講者という側面と同時に、厳しい目を持つ市民としての両価性がある

るのです。

それにしても、受講者が持つ疑問は実に多様であり、また、市民に立脚したものでした。それが時には、サービス利用者の目に変わりうることを承知している我々は、そんな教訓を未整備な制度の改善へと変換させていったのです。これは予想もしなかった二次的効果でした。

● 4 — 第一回体験学習と第二回体験学習の比較

なんとといっても今回の体験学習が前回のものと違う点は、その受講希望者の多さです。第一回目は、定員に満たない五名の参加にとどまりましたが、今回は定員をはるかに上回る十七名の方から受講希望があったのです。

しかし、キャパステイの関係で、七名の方に次回の体験学習をお待

ちくださるようお願いせざるを得ませんでした。

また、今回の体験学習では、半数の方がすでになんらかのボランティア活動をしており、うち一名は美山ホームで寮母を勤める、いわゆるプロとしての参加でした。その分、テレビ・新聞などから容易に得られる膨大な情報量からか、知識だけが先行しがちな方も目立ちました。

それでも、実際に協会の在宅サ

第1回体験学習		第2回体験学習	
実施期間	平成元年10月26日～11月27日	実施期間	平成3年11月11日～22日
参加者数	5名	参加者数	10名
性別	女性のみ参加	性別	女性のみ参加
平均年齢	42才	平均年齢	42.1才

ービスを体験するにあたって、その勝手の違いに、多く受講者が戸惑っていたよ

うです。

訪問先で「葬式代が無いんだ！」と泣きつかれた受講者の一人は、自分の価値観を根底からくつがえされたといえます。在宅療養する方々の多くが、死と隣り合わせにあるターミナルケア（終末医療）の問題を抱えていることを、その肌で感じたのでしよう。

それは地域の状況が、第一回目の体験学習実施時より重度化していることを表しています。

● 5 — 事業担当の反省

ここで本事業改善の視点に立った、いくつかの反省点を挙げておきます。

まず事業計画策定の段階から協会スタッフ（看護婦・介助員など）の参画を得なかったこと。

これは最も大きな反省点のひとつです。協会事業利用者和我々の

接点は、唯一訪問看護婦や介助員にのみあるのです。

また、介助ボランティア・グループとして大きく飛躍しつつある『こだま会』の参画を得なかったことも、同様の反省点といえるでしょう。

それにしても、この事業を実施する度に我々事務担当は現場に対する無知を実感します。地域はまさに生きており、しかも重度化という方向で加速度的に変容しているのです。

さらに、協会スタッフを事業計画において参画させなかったことは、協会事業利用者との連絡調整にも支障をきたす一因となりました。当然、カリキュラムのプログラミングにもそうとうの不備があり、そのつけは、受講者に回る結果となってしまったことを深く反省しています。

最後になりますが、この事業にご協力くださった協会事業利用者の皆様、本当にありがとうございます。

これら全ての事象を、次回の介助ボランティア体験学習に生かしていきたい考えです。



自分自身を見つ けるために

●石渡治代

私は、この体験学習に参加するにあたって特にきちんとした目標もなく、強い意志もありませんでした。ただ今すぐは何もできなくても、自分自身にとって勉強になるのではないかと、思い切ったま
ったく知らない世界へ飛び込んでいく気持ちでした。しかし、最初の基調講演で甲斐田先生のお話を聞き、自分がこれから学習していくことの何たるかを多少なりともつかんで、心構えを再確認し、今

までの中途半端な気持ちに終止符をうちました。

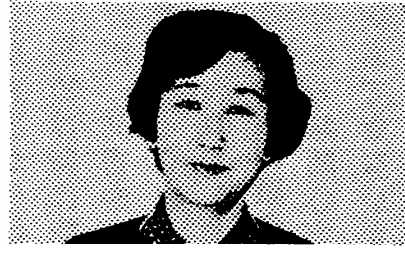
体験学習では、三軒のお宅に伺い、看護婦さんや介助員さんの訪問サービスに同行させていただきました。正直いって、看護婦さんや介助員さんのなさることは、私にとってほとんどがはじめての経験で、何をどうお手伝いしているのか、どのようなタイミングでおこなえばいいのか、見当がつきませんでした。それでもそれぞれの
お宅で、私を気持ち良く受け入れてくださり、最初のお宅より、二回目のお宅、二回目のお宅より三回目のお宅と、回を追うごとに、私の緊張と不安はうすらいでいき
ました。

その他にもハンディキャブ（車）で、車椅子の方の病院の送迎にも同行いたしました。病院までは送迎してあげられても、その中では、

他の患者さんと同じに順番を待ち、お薬のできるのを待たなければいけないのでしよう。

それが社会とのつながりであり、秩序だと思えます。

この三軒のお宅と病院の送迎に同行して強く感じたことは、みなさん社会との関係をたち切らないで、明るく前向きな生活をされていくということ。それはやはり日々の生活の中で看護なさっているご家族の方と、サービス協会の看護婦さんや介助員さんの努力の結果だと思えます。その中のほんの一部でも私にできることはないでしょうか。それが体験学習を終えた私の心からの気持ちです。平凡に、自分の家族中心に生活してきた私は、とても貴重な体験学習をさせていただきました。サービス協会のみなさん、本当にありがとうございました。



ボランティア活動したい ● 漆原雪路

三浦に越して来て三年半の私は、三浦市のことは城ヶ島とマリリンパークぐらいしか知りませんでした。ボランティアの実態がどうなっているのか。どうしたらその輪の中にいれてもらえるのか。そんな時、他の講座で一緒だった方に「こだま会」のことを聞きました。

そんな時、社協みうら二十一号に介助ボランティア体験学習実施の報があり、早速申込みをしました。第一回目は甲斐田先生の基調講演です。「ボランティアは、一

見、人のためにしているようだが、それは自分に返ってくる喜びである。患者を支えているのは家族の励ましであり、家族を励ますのは、友人であり、ボランティアである。人の心が近づくのは、時間がかかるものであり、また、思いがけないところまでできるものである。」といったお話しをお伺いしましたが、実際にそれぞれのご家庭に入っていくのは不安でした。私の同行させてもらった家庭では信頼関係ができており、ここまでになるのは、やはり大変だったのではないかと思います。相手に対する思いやりの心がなければならぬのはもちろんですが、だれにでも簡単にすすめられるのではなく、自発性がなければ続けられないのではないかと思います。

数年前に入院した時、身よりのない人と、身内の寄りつかない老人と同室になりました。身の回りの整理も洗濯も思うようにならず、病院側から厳しくいわれているのを見かねて、見つければ叱られますが、他室の方とそっと手伝いました。この時、ボランティアの人が一日おきに一、二時間でも来てくれたら解決することなのだと思います。経済的にも家族にも恵まれて闘病している方も多くいます。でも、家族の方が疲れていることもあると思います。この方達の負担を少しでも補ってあげられるのが、介助員さんであり、看護婦さんであり、ボランティアさんなのです。

反省会の席上でこだま会の方達が着実に活動していらっしゃるのと、いろいろな分野で活動している方達のお話し、こんなに沢山のボランティアのグループがあることも知り、有意義な時でした。こだま会に入れていただいて、今までに学んだこと、また先輩の方達の教えを受けながら、気負わずに続けていきたいと思えます。